.99

11.4.1

特240

81

廣田弘毅と寺内大將

子島俊治著

×複写

十錢

始

→昭和十一年三月九日、組閣本部より
厳戒裡に参内する廣田首相（中央）

←昭和十一年三月七日廣田内閣成立の鍵を握る
寺内、廣田の重大會見。午後十時三十分組閣
本部に入る寺内大將（中央）

廣田弘毅と寺内大將

目次

廣田內閣成立迄の情勢……四
現狀維持派と打破的勢力……六
近衛公大命拜辭の理由……九
廣田首相の表面と本體……一三
豪放に見えて細心な廣田首相……一五
廣田內閣は何時迄續くか……一七
兩勢力の協和は失敗……一九

廣田弘毅氏の經歷……二一
寺內大將と廣田內閣……二三
陸軍大臣になる迄……二六
寺內大將の將來……二八
現狀打破勢力の結成……三〇
寺內大將に望む……三二
寺內壽一大將經歷……三三

廣田內閣成立迄の情勢

廣田首相と寺內陸相を論ずる前に廣田內閣成立に至るまでの社會的情勢に付て一寸簡單に申上げる必要があると思ひます。

滿洲事變後の日本の社會の情勢は大體に於て現狀維持派と現狀打破的勢力との對立抗爭と云ふ點から見るべきであると思ひます。

勿論現狀打破の勢力と言つても、その主張に色々あつて日本の社會組織なり、經濟組織なりに對して、ハッキリした認識を持つてゐるものと、認識を持たないものと、色々のものがあるけれども、大體に於て現在の日本では駄目だ、何とかして之を打開して新しい日本を作らなければならぬと云ふ主張を持つものを現狀打破的勢力と云ふべきであると思ひます。

滿洲事變と五・一五事件の直後に於てはこの現狀打破的勢力と云ふものが非常に有

力なやうに見えたのであります。例へば軍部內に於ても色々な國家改造論と云ふものが主張されたのであります。單に軍部內に於ける中堅少壯將校ばかりでなくして、首腦部に於てもこの國家改造論と云ふものが唱へられたのであります。中にも當時の陸相であつた荒木大將の如きは、その間に軍部のことばかりではなくして、農村問題、中小商工業者の救濟問題等に付ても眞劍に考へ相當思ひ切つた改革論を述べて居つたのであります。

荒木さんが陸軍大臣當時、單に國防、外交問題ばかりでなくして農村問題に付ても相當なる意見を持つて、そして當時の農林大臣であつた後藤さんと一緒にこの農村問題解決の爲に、內政會議の開催まで主張して、そして二、三回の會議を開いたと云ふこともあるのであります。

それから、またこの現狀打破的勢力の一つと見られる新官僚の擡頭と云ふものも滿洲事變、五・一五事件直後に於て非常な勢を持つて現はれたのであります。當時後藤

農林大臣を大將として、現在の調査局長官である吉田茂氏、或は又內務省、農林省に於ける所のこの新官僚と云ふものが勢力を結成して、そして閣外に於ける近衞公等と連絡を執つて現狀打破的主張をなしたと云ふことはその當時明白なことであつたのであります。

現狀維持派と打破的勢力

斯の如くに滿洲事變と五・一五事件の後に於ては表面上には現狀打破的勢力が有力の如く見えたのであります。併しそれは表面上のことであつて何と言つても現狀維持の勢力と云ふものは非常な根强いものがあるので、下の方からグン〳〵と現狀打破の勢力を押し詰めて行つたやうな形があるのであります。

卽ち第一に滿洲事變後或は五・一五事件後に於ける所の日本の國情に對して、元老が內閣の首班たる人を奏請する場合も現狀打破の主張と云ふものを出來るだけ抑へつ

けて、そして所謂現狀維持派の言ふ所の國內非常時と云ふものを解消せしめる意圖の下にさう云ふやうな總理大臣を奏請してゐるやうであります。少くとも現狀打破的色彩の濃い人を持つて來ぬと云ふのが、その方針らしいやうであります。齋藤內閣、岡田內閣と云ふのはその最も好適例と云ふことが出來ると思ひます。

從つて齋藤內閣も岡田內閣も最初は非常に現狀打破的の主張と云ふものを容れるやうに見えたのでありますが、現實の問題にぶつかつて來ると云ふと必ず現狀維持の主張の下に、その事を運んで行くと云ふ風になつて居つた譯であります。

さう云ふ爲に現狀打破の勢力と云ふものも一歩〳〵讓歩して行つた形になつてゐるのであります。先づ第一に閣內に於ける齋藤、岡田兩內閣に於ては、この現狀打破的主張をなして居つたと言はれてゐる荒木、林兩陸相、後藤農相の如きは一歩〳〵この現狀維持的の勢力と妥協して居つたやうに世間から見られてゐるのであります。例へは荒木さんが陸軍大臣當時に頻りに農村問題の解決と云ふことを主張されたけれど

も、齋藤内閣に於て豫算を組む時に海軍の方からして非常な反對があつて、海軍がごねまはつた時に荒木さんは海軍の爲に滿洲事件豫備金二千萬圓の中の一千萬圓を投出して閣議の紛糾を救つたことがある。併ながら肝腎要の農村豫算に付ては單に今後內政會議を續開して努力すると云ふやうな程度で結末をつけたと云ふ風である。

又林陸相も、陸相が教育總監當時は國家改造論者の總本山のやうに見られて居つて、多數の人々がそこに出入りするやうに思はれたけれども、此の人が陸軍大臣になるや、矢張り國家改造に對して積極的な熱意を示すと云ふやうなことはなかつたやうであります。一方新官僚連の方も段々と上層部の方が遊離して行つて、そしてこれまで現狀維持的主張を持つて來た所の舊官僚群の中に沒落して行つたやうな形であります。後藤さんもさうだし、岡田內閣の末期に至つては新官僚の前線には唐澤警保局長あたりが踊ると云ふやうな狀態になつて、皆な上層部が遊離して居つたやうな形になつたやうであります。

近衞公大命拜辭の理由

さう云ふやうな狀態であつて、何故一體それならば、日本の今までの現狀打破論と云ふものが現狀維持派の勢力に屈服して行くやうな格構になつたかと云ふと、これはどうしても現在の社會情勢とか、或は經濟組織に對してハッキリした認識を持てないと云ふばかりでなくして、各々の勢力が縱にのみ對立して行つて橫の勢力を結成すると云ふやうなことがなかつたんではないかと見られる譯であります。

所がこの現狀打破の勢力と云ふものがだん〳〵著しい力になつて來る動向が去年の中頃からあらはれて來たのであります。何故かと云ふと、それは軍部內に於ける所の現狀打破の主張と云ふものが大體統一されて來たやうな格構であるからであります。軍部內に於ける動向が統一され決定されたと云ふことは、同時に現在の日本の政治上に於ては日本の政治上の動向を決定すると云ふ風に重く見られる譯である、何故かと

云ふと、現在の軍部と云ふものは日本の社會上に於ける指導的地位に立つて居るからであつて、軍部の動向と云ふものは日本の政局の流れに非常なる力を持つてゐると見るべきであるからであります。

軍部内の政治上に對する動向が斯の如くに現狀打破的動向に一致を見たと云ふことは大體に於て永田事件以來と見るべきであると思はれます。詰り林陸相からして川島陸相に移つた、その頃からして明白に軍部の動向と云ふものが現狀打破に一致するやうになつたのではないかと思はれます。その結果現狀打破の勢力の陣營と云ふものが表面にあらはれて來るに至つたのであつて、かりに岡田内閣が續いてゐたにしてもこの現狀打破の主張と云ふものがチョコ〳〵と現はれて來て、それに依つて岡田内閣が非常な苦しい立場に至るであらうと云ふことは、今年の始め頃からして明白に豫想されて居つたやうに思はれます。

さう云ふやうな情勢が今度の政變に明白に現はれて來たのではないかと思ひます。

今度の政變に於て元老とか重臣と云ふ人々はやはり此の情勢を見ない譯でもなつかたのであります。

例へば二・二六事件と云ふものがなくて政變が起つたとしても、この現狀打破の勢力と云ふものが擡頭し來たつたと云ふことをその儘默視することは今日の情勢では出來なかつたらうと私は思ふのであります。どうしてもそこに現狀打破の主張と云ふものも相當入れて行かなければこの政局の擔當が困難であらうと云ふことを既に一日前からして豫想して居つた人々があつたのであります。

併しながら元老としては、どうしても現狀打破の主張のみを持つてゐる人を奏請すると云ふことは色々の意味に於て困難である、それで現狀維持派にも、また現狀打破にも強い主張を持たない所の中間にある人間を選ばされたのであります。それが爲に第一に擧つた人が近衛公であります。

併ながら近衛公と云ふ人は今日までの陣營から見れば、明白にこの人は中間的の人

間でなく、現狀打破の陣營にある人と言はれて居つたのであります。近衛さんは滿洲事變、五・一五事件の後に於て軍部の人達、或は新官僚の人達との交際を頻繁に行つて居つて、國家改造論者からは、當時の教育總監である林大將と二人して國家改造論者の總本山のやうに見られて居つたのであります。平沼騏一郎男、近衛公、林陸相、それから協力內閣運動の直後に於ては安達謙藏氏、この四人の人々は、滿洲事變、五、一五事件の當時に於て現狀打破の主張をなす四本柱のやうに唱へられて居つたのであります。

それから齋藤內閣が出來た後も、後藤農相、荒木陸相との交際が頻繁に行はれて居つたし、岡田內閣が出來た後も新官僚とか、軍部の人達との交際が非常に行はれて居つたのでありまして、その意味から見て近衛公は現狀打破の人であると思はれて居つたのであります。

西園寺公は中間的な人として近衛公を推さうとした、所が近衛公の方は、社會に對

する認識については、全く元老の期待する所の認識と違つて居るからして、こゝに於て社會上に對する認識に於て、元老と近衛公の認識が違つて居つたと云ふことは外から見ても明白に看取されるのであつて、恐らく近衛さんが後繼內閣組織の大命を拜辭されたのも、さう云ふ點に原因があるのではないかと私は思ひます。

廣田首相の表面と本體

その次に廣田さんが出たのでありますが、廣田さんはそれならばどう云ふ陣營內の人と見られて居つたかと云ふと、少くとも今日までは廣田さんは現狀維持派の人と見られて居つたのであります。けれども今度の組閣に付ては彼自身が何等さう云う準備がなかつたと云ふ點もあるし、或は又、非常に不慣れであつたと云ふ點もあるし、兎にも角にもあの人が最初竝べた所の顏觸れを見た時に、どうしても現狀維持派の人々のみを持つて固められたと云ふことは、これは誰しも考へたことであつて、二・二六

事件のあるなしに拘らず、この政局の變動に於て、あゝ云ふ顔觸れの閣員を示した時に、現狀打破の主張してゐる所の陣營内からして反對の聲が起ると云ふことは當然のことであるのであります。

詰り現狀打破の人々と云ふものは、政局の變動に對しても、酷く社會情勢の變革、社會現象と云ふものの廣い點から政局の點を見てゐることに對して、現狀維持派の人はどうしても單なる政治現象として政局の變動を見る從來の慣習を持つてゐる譯であります。さうすると云ふと二・二六事件と云ふものがあつてあゝ云ふ重大なる社會問題が起つた後に、單に政治現象とのみ政局を見る人々と、廣い社會問題として取扱ふ所の人々の間に意見の相違を來たすと云ふことは明かなことであつてこの陸軍が中々ウンと言はなかつたと云ふことは當然のことであらうと思ふのであります。そこで廣田さんは己むを得ず現狀維持の本體に現狀打破の組閣をなして内閣を作つたものと見ることが出來ると思ふのであります。

詰り廣田内閣と云ふものは本體を見ると、やはり現狀維持の主張を持つてゐる人々が多いやうであります。それに現狀打破の主張を表面上掲げてゐるのであつて、今後眞の現狀打破を主張し、漸進的なり、國内改革を斷行する爲には更にもつと一段の努力をしなければ、私は中々困難ではなからうかと思ふのであります。

豪放に見えて細心な廣田首相

廣田さんと云ふ人は中々の政治家であつて、外務大臣當時から非常な政治的手腕を持つ人として言はれて居つたのであります。廣田さん自身が政治家たる所の野心を持つて居つたと云ふことは昔から言はれてゐることでありまして、廣田さんが衆議院議員に出るとか、出ないとか色々な噂も飛んだのであります。

廣田さんと云ふ人は外交官としては私は駐露大使までは餘り順調な人でなかつた人ではないかと思はれるのであります。多分駐露大使をお罷めになつて、そして相州鶴

沼の別莊に居られ、當時書を友とし、或は散歩して、將來の爲に修養されたさうであるが、或はその當時から既に國維會のメンバーとなられたり、或は色々政治家との交際を行はれて、そして政治家としての進出を非常に企圖されて居つたと云ふことは明白なことであるのであります。

廣田さんと云ふ人は一見非常に豪放に見えます。あの人の生立を考へても、或は外交官として知遇を受けた人々から見ましても、非常に日本的な、純東洋的な外交官となられて居つた人であつて、豪放な人のやうに見えるけれども、私は非常にその豪放の背後に頗る細心な、寧ろ才人肌の人ではないかと思はれるやうな點があの人に見られるのであります。

さう云ふ才があると云ふ風な爲に、外交の點に至つても宣傳的な所があるやうに見えて居つて、事實はさうでないでせうけれども廣田外交と云ふものは一面國内宣傳外交と云ふやうな惡口を言ふやうな人があつたのであります。ですから廣田さんが、さ

う云ふ風に場合に依つては政界に飛び出し、政治家になる人だと云ふ所の、この肚が充分にあつたのであつて、今度大命降下があつた場合も進んでお受けしたと云ふやうな點も頷かれるのでありまして、あの人としては年來の希望がこゝに達せられてやつたのではないかと思ひます。

外務大臣當時の成績に付ては既に今まで屢々傳へられて居ることであつて、相當諸外國に對しても人氣があり、元老方面の外交方面に關する信任も非常に厚いと言はれて居るのであります。

廣田内閣は何時迄續くか

たゞ廣田内閣と云ふものが果して何時まで續くであらうか、さう云ふやうな問題であるのでありますが、この點になると云ふと非常に將來を危まれてゐるのであります。何故かと云ふと、廣田内閣と云ふものは元々現狀維持の陣營の人が多く固め、—

二、三の人を除いては—、現狀維持の人々であるのに、俄かに作る所の現狀打破論を持つて來て、その政綱、政策に掲げんとしてゐるのであります。さうすると一時良いかもしれないが、いざとなると云ふと、現狀打破の勢力と現狀維持の勢力の板挾みになるのではないかと思ひます。

現に廣田さん自身がさう云ふ立場に置かれてゐるので、漸進的にせよ、もつと强硬なものにせよ、國内改革を行はんとせば現狀維持の人々から反對されるのではないか、さうすると云ふと何もせず野たれ死をするやうな結果になるのではないかと思ふのであります。

さう云ふやうな難關にぶつかる所の最初のものは恐らく財政問題ではないかと思ふ、卽ち既に廣田内閣の參謀格である所の馬場藏相の財政問題に對する立場からしてこの事に明白に豫想されることであつて、恐らく馬場さんが現狀維持派、現狀打破派の何れか一方に屈せざる限りは、遂に馬場さんはこの革新的な勢力と現狀維持派との

間に板挾みになるのではないかと思はれるのであつて、豫算編成の時にこれが明白に現はれるのではないかと思ひます。

さう云ふ場合に一體どう云ふやうな態度を執るか、馬場財政と云ふものが財界からの根張り强い所の反對にあつた場合に革新的な主張を有する人々をバックとして、あくまでこれをやり通さうとするか、或はまた馬場さんがこの財界の要望を容れて、革新的な人々の反對する場合にはどうするか、結局馬場さん自身は苦しい立場に立つて行くのではないかと思はれる、馬場さん自身が苦しい立場に立つた時に廣田さんは如何にしてこれをやつて行くか、こゝに内閣の運命が決せられる所があるのではないかと思つて廣田内閣の危險性は既に廣田内閣が作られるその當時からして充分に豫想されるのではないかと思ひます。

兩勢力の協和は失敗

従つて廣田内閣と云ふものが、眞に現狀打破の主張でやつて行かふとするならば、その背景となる所の力の結成を圖らなければならぬと思ふのであります。力の結成と云ふのは單に軍部ばかりの力でなしに、更に政黨方面に於ても、或は又官僚方面に於ても、現狀打破を主張するものの勢力を結成して、現狀打破の陣營を强固にして、その上に立つて行かなければ思切つて、漸進的にせよ、强硬的にせよ、國内改革の斷行は難しいのではないかと思ひます。

さうでないと結局に於て現狀維持の根張り强い勢力に依つて一歩〳〵侵蝕されて、そして充分なことが出來ない、それが嬰て閣内に於て現狀打破を主張する所の人々の反對に依つて、廣田さん自身が非常に苦しい狀態に陷つて、廣田内閣が段々細まつて結局、何もせずして、この廣田内閣は替るのではないかと思ふのであります。

廣田外交では萬邦協和と云ふことを主張してゐるけれども、現狀打破、現狀維持兩方を調和すると云ふことは中々今日の社會情勢では困難なことではないかと思はれ

る、齋藤内閣、岡田内閣に於てこの調和を圖らうとして、或は内閣調査局を作り、その上に内閣審議會を作つたけれども何等の用をなさない、そしてこの兩内閣も段々と苦しい立場になつて、そして廣田内閣になつたのであるから、又齋藤、岡田と同じやうなやり方をして行つたのでは結局に於て野たれ死をするより外にないのであつて、今日からしてハッキリと現狀打破に對する主張を持つて、勇敢にそれを行ふやうに、廣田さんを始め、閣内一致してやると同時にそれを實行する上に於て必要なる、先程申上げましたやうに、勢力の結成を圖つて、それをバックとして飽までやらなければならぬと思ふのであります。

廣田弘毅氏の經歷

氏は福岡縣福岡市鍛冶町二〇石屋廣德事、廣田德平氏の長男として明治十一年二月に生れ、幼名は丈太郎であつたが後之を改めました。明治三十八年東京帝大法科、政

治科を卒業して同三十九年外交官及領事官の試驗に合格し、外交官補大使館三等書記を經て外務書記官、農商務書記官、大使館一等書記官、外務事務官、大使官、參事官、外務省情報部次長、外務省歐米局長、特命全權公使和蘭、ソヴイエト駐劄大使等に歷任し昭和八年岡田内閣の時外務大臣に親任せられ、昭和十一年三月大命降下して總理大臣に親任せられたのであります。

寺内大將と廣田内閣

この廣田内閣に於て現狀打破の主張を代表するものが寺内陸相であります。寺内さんは今度の政變に於て軍部を代表して、そして現狀打破の主張をその組閣の根本方針に織込ましめて、その花形になつたのでありますが、元來最近の陸軍に於て、陸軍の統制の任に當り得る爲めには、どうしても無色であると云ふことと、最近の陸軍の現狀打破の動向に乘り得ると云ふことが絶對條件とされて來たのであります。

この事は、殊に永田事件以來著しかつたのであります。川島さんが陸相となつたのも完全とまでは言へないけれども、大體に於てその條件を備へておつたからであります。

川島と云ふ人は、決して部内に於てその地位に色彩が濃い譯でなかつた、また川島さん自身の眞意は果してさうであつたか、どうかは疑問だがそのブレン、トラストとも見られる人々の中には、林陸相時代よりも現狀打破の傾向を持つて居つた人が多かつたのであります。それだからこそ色々の批評はありましたけれども、川島と云ふ人はその地位に据り得たのであります。もし川島さんの部内に於ける地位が、或は色彩が濃かつたり、又はその動向に於て現狀打破に反するやうなことがあれば、川島と云ふ人は、今日までその地位に上り得なかつたと私は思ふのであります。最初現狀打破の動向と云ふものは、先程も申上げました通り、部内には色々な異論もあつたけれども、昨年から全陸軍の動向は變つて來た譯であります。國の内外の情勢から考へて陸

軍の中堅小壯組の意向は大體現狀打破に一致して、そして首腦部も之に反對する譯にいかなかつた。この現狀打破の動向に乘ることを得ない人々はその地位を去らざるを得なかつたし、又その動向に乘り得た人は中央部の人となり得たのであります。

この全陸軍の動向に對して世間では往々その認織を誤つた觀がある、詰り現狀打破の主張と云ふものは、全陸軍の動向ではなくして部内に於ける一部の人々の主張であると見た人があつたのであります。そしてこの全陸軍の動向に對して之を否定する人が多かつた。この觀測と云ふのは、今度の政變に於てもまだ〳〵行はれたのであります。

詰り現狀維持の陣營の人々は最後までその觀測をなして居つた。この人々の如きはそこに一種の安逸の氣分さへ味つて居つたのであります。そこに今度の政變に對して非常に間違つた觀測をした人が出て來たのであります。

ところが軍部の現狀打破論は去年頃から統一されて實際政治の上に現はれて來たのであります。今までは現狀打破論と云つてもそれがハッキリしなかつたか、今日に於てはそれが統一されて全陸軍の動向がここに統一されて來た譯であります。

併しこの動向に決して二・二六事件があつたからこれが統一されたのではなくて、先程申上げました通り、岡田内閣の次に來たる政變に於ては、必ずこの現狀打破と云ふものは陸軍の表面から要求されるであらうと云ふことは多くの人々の充分に認めて居つた所であります。だから何人が川島さんの次に陸相になるにしても、この現狀打破の主張を持たずしてその地位に坐る譯にいかないのである、詰り陸軍大臣たるものは部内に於ては餘り色彩が濃くないと云ふことと、現狀打破の主張を持つと云ふことが條件とされてゐる譯であります。さうでなければ、如何に陸軍大臣になつても、その統制が困難であると言はざるを得ないのであります。

陸軍大臣になる迄

そこで寺内さんだつてこの現狀打破の主張に反することは出來ないのであります。寺内さんが、然らば、何故に多くの人達から選ばれて陸軍大臣に推されたかと云ふことには、勿論色々なことがあるけれども、先づ第一に寺内さんは無色であると云ふ條件を備へてゐる人であります。寺内さんの性格にもよるでせうが。それよりも先づ第一に無色であると云ふのは、寺内さんは昨年臺灣軍司令官から大將になつて、軍事參議官になるまで、一度も中央部の要職についたことがないのである、大抵地方廻りばかりして居つたのであります。

故寺内元帥の息子さんで、さうした名門の出であつて、本當ならば中央部の要職につかなければならぬ人であるけれども、どう云ふことか、この人は地方廻りばかりして居つた、ところが昔ならば中央部の要職につくと云ふことが非常に良いのであるけれども、今日に於ては中央部の要職につく人はどうしても政治問題を取扱ふ爲か、世間から色々と色をつけて見られる虞れが多少ありますから、地方廻りをしてゐると

色彩をつけられることが少ない、寺内さんは幸か、不幸か地方廻りばかりして居つた爲に、今日に於ては色彩をつけて見ると云ふことが薄い譯である、詰り無色の人として見られる人だと云ふやうな、言はば今日の陸軍としては非常に得な立場に置かれたのであります。

この無色であると云ふことが寺内さんをして陸軍大臣たらしめた原因になつたことは否定出來ないと思ふ。既に昨年邊りからして川島の次は寺内であると云ふやうな聲が高かつたのであります。

第二の條件で現狀打破の主張を果して持つてゐるか、どうか、これは、實は非常に疑問である。却つて現狀維持の陣營の人として寺内さんは見られたことがあつたのであります。少くとも現狀維持派の人々は寺内さんを自分の陣營内の人として見て來た。

ところがその寺内さんが今度の入閣の際に、現狀打破論を唱へて入閣したのであり

ますから、此の現狀維持派の人々が驚いたのも無理ありませぬ。そして、これは寺内さんと雖も全陸軍の動向に反するわけにいかないのであつて、また彼自身この全陸軍の動向に乘つて居つた。かうして陸相に彼が推され、軍部の主張を廣田内閣の根本方針の中に織り込ましめたのであると思ふのであります。

寺内大將の將來

寺内さんに對する陸軍の今日の期待は大變なものである。寺内と云ふ人は名門の家に生まれて、そして非常に氣持のサッパリとした人として好感を持つて迎へられてゐるのであります。その童顏から見ても何となく坊チャンらしい。坊チャンらしいからしてやはりこれはロボットぢやないか、下の方から押されて行つて、そしてその地位に止まるだけに過ぎないのであつて、結局何も出來ずして寺内さん自身が苦しい立場に置かれるだらうと云ふやうな悲觀論を早くも抱くやうな人もありますけれども、ま

たその一面には坊チャンらしいところが、去つて現狀打破の動向に乘つて思切つて之を實行するだらうと大いに期待してゐる人もあるのであります。

殊に寺内さんとしては、寺内さんは十一期生の人であつて、林、眞崎、阿部、荒木川島、南と云ふやうな人々が今回退いた後に於て、今後關東軍司令官になつた植田さんと共に、この陸軍の最前線に立つて行かなければならぬ人であつて、陸軍の動向と云ふものが現狀打破に一致した以上は、今までのやうに板挟みになつて妙に妥協する必要もない譯であります。現狀打破論を主張して充分進み得る地位に置かれるわけである、從つて陸軍の情勢に變化を見せざる限り、寺内さんはその地位に立つて、軍の主張を國政の上に充分に反映せしめることが出來ると思ふのであります。たゞ寺内さん自身がもう現狀維持論に早變りする時には直ちにその軍部内に於ける地位を失ふに至るであらう、と云ふことは豫想される所である。

殊に寺内さんには今回の肅軍と云ふ大使命を帶びさせられてゐるのであります。

陸軍の上層部が去つた後の陣容の整備についても、あくまでも慎重な態度を執らなければならぬのであつて、果して如何なる方針を持つてこの肅軍を實現するか、對政府關係よりもこの方が却つて深く寺内さんを考慮せしめるだらうと思はれますが、國民の視聽も亦この肅軍の一點に歸せられてゐるのであつて、それだけにこの方面の寺内陸相の態度は最も注目されてゐるのであります。

現狀打破勢力の結成

勿論この肅軍と云ふことについても、軍の現狀打破の動向と云ふものも深い關係を持つてゐるのであつて、そこで兩方から考へて行かなければならぬのであつて、肅軍の實を擧げんと思へば、矢張り一面に於て現狀打破の動向の實現を圖からなければならぬと思ふのであります。

たゞ、先程も言ふたけれども、現狀打破の主張と云ふものは、單に軍部だけの主張

であつては實際政治上實現は困難であると思ふのであります。實際を言ふならば、今度の政變以前に於て、既に政黨、軍部、官僚、三方面に於て現狀打破の主張を持つものの勢力を結成して置かなければならなかつたと思ふのであります。先般の總選擧に於ては寧ろそれを以て闘爭の旗印とすべきであつた、ところが先程も申上げましたやうに、現狀打破の勢力と云ふものは今日まで離れ〴〵であつて何等の統一がなかつたのであります。

之を結成せんとする人もなかつたし、又三勢力が各々他の勢力を反對視して來たわけであります。軍部が政黨の惡口を言ふ、政黨が軍部、官僚に對して反感を持つ、官僚は又その間に介在すると云ふ風に、現狀打破の主張を持つて居りながら、それ等の人々が横に何等結成されて居らなかつた。もし政黨、軍部、官僚でも、この現狀を打破しなければならぬと云ふ人が横に結成されて居つたならば、今度の政變も餘り騒がずに軌道に乘つた現狀打破の政治實現を圖り得たと思ひます。

縦に對立して居つた所に色々な難しい問題があつたのであつて、今日は廣田内閣にせよ、又軍部の現狀打破論にせよ、之を實現せんと思へば、これを實行するだけのバックとして一日も速かに現狀打破の大同團結を圖らなければならぬと思ふのであります。さうでないと根强い現狀維持派の攻勢の前に屈服しなければならぬことになる。

寺内大將に望む

先程申しましたやうに、さう云ふ風に對立して來ますと、廣田内閣の如きもその對立に果して堪え得るか、どうか疑問であります。軍部を代表してこの中に入つてゐる所の寺内陸相の立場と云ふものが、さう云ふ風な内閣をして漸進的にせよ、この改革を斷行せしめるところの最も重大な立場に立つてゐるのであるから、この場合單に軍部だけの現狀打破の主張に非ずして、政黨人の第一線に立つてゐる人、その現狀打破の意識を持つ政黨人、或は官僚、さう云ふ人々の立場をよく諒解し、國民の力を背景

としてこれを實行しなければならぬし、また廣田内閣にむちうつて飽までも現狀維持派の勢力の前に屈服しないでやらうと云ふだけの精神がなければ中々困難であらうと思ふのであります。

この軍部の現狀打破的傾向を代表する寺内陸相にこの點を充分に考慮されるやうに望むのであつて、この根强い、そして默つてドシ〳〵と壓力を加へて來るところの現狀維持の勢力に對してどこまでも閣内に於て、現狀打破的傾向を代表して、之に負けずに漸進的に國内改革を斷行して貰ふやうに、多くの國民が期待してゐるんぢやないかと思ふのであります。廣田内閣に對する國民の期待もまたそこにあるものと考へます。

寺内壽一大將の經歷

氏の父は周防山口藩士宇田多庄兵衛の二男で嘉永五年二月五日山口郊外宮野村に生

れ幼名を壽三郎と謂ひましたが、長門藩山口留守居役寺内勘右衛門の養嗣子となり十三四の時整武隊に入り、時の兵部大輔大村益次郎に認められて大阪兵學寮に入り卒業後明治四年歩兵少尉に任ぜられ同十二年累進して少佐となり、同十五年佛國留學を命ぜられ、後日清戰役の功に依つて功三級金鵄勳章を賜つたのであります。それより陸軍士官學校大隊司令官、陸軍大臣秘書官、陸軍戸山學校次長、第一師團參謀長、參謀本部第一局長、教育總監部長、參謀本部次長、陸軍大學校長に歴輔し同三十五年三月第一次桂内閣の時陸軍大臣に親任せられ引續き西園寺内閣、第二次桂内閣に亘り殆んど十年間其の職に在つて、其の間日露戰役の功を以つて勳一等功一級に陞叙せられ、同三十九年陸軍大將に榮進しました。翌年華族に列して子爵を授けられ朝鮮總督に親任し日韓併合の偉功を樹てた功に依つて伯爵に陞り大正五年元帥府に列せられ元帥の稱號を賜はりました。此の年十月組閣の大命を拜し内閣總理大臣として敢然自信ある超然内閣を組織し謹直嚴格と公明正大とを以つて、旗幟として善政を布いたが同七年

九月辭し翌年十一月三日大磯の別邸に病歿しました。年六十八歳、危篤に當りて從一位大勳位に叙し菊花大綬章を授けられました。

壽一氏は正毅氏の長男で明治十二年八月生れ大正八年襲爵す、明治三十三年陸軍士官學校卒業歩兵少尉となり、後陸軍中將に累進しました。其の間陸軍大學校卒業、參謀本部々員等陸軍大學校兵學教官、近衛兵第三聯隊長、近衛師團參謀長、歩兵第十九旅團長、第一師團司令部附、朝鮮軍參謀長、獨立守備隊司令官、第四師團長等に歴補し昭和九年八月臺灣軍司令官を經て昭和十一年三月陸軍大臣に親任せられたのであります。

昭和十一年四月一日印刷納本
昭和十一年四月五日發行

「廣田弘毅と寺內大將」〔定價拾錢〕

著者　阿子島俊治
發行人　東京市神田區小川町三丁目二六番地　青木朴
印刷人　東京市豐島區長崎南町二丁目二一五二番地　鈴木秋想
印刷所　大東社印刷部

不許複製

發行所　東京市神田區小川町三丁目二六番地　芳名堂

大賣捌所
東京市京橋區銀座西二丁目三番地　鐵道賣店賣捌所　鐵道保養會
東京市京橋區銀座西二丁目一番地　啓德社
東京市神田區神保町一丁目一番地　上田屋書店
大阪市北區堂島上二丁目二五番地　新正堂書店

終